開催報告

第 11 回赤ちゃんフォーラム

「乳幼児期の仲間関係と社会性の発達」

講演 1　齊藤多江子氏（子ども教育宝仙大学）「1 ～ 2 歳児の仲間と物とのかかわり」
講演 2　藤田文氏（大分芸術文化短期大学）「遊び場面における幼児の仲間との関係調整の発達」
講演 3　岩田恵子（教育学部 / 脳科学研究科）「子どもがケアする世界に聴き入ること」

今回の赤ちゃんフォーラムは「乳幼児期の仲間関係と社会性の発達」について考える機会として企画された。

齊藤多江子氏は、保育所等で 1 ～ 2 歳児に頻繁に見られる仲間との物のとりあい、さらにその時期のとりあいだけではない物を介する仲間とのかかわりについてご報告頂いた。時には、仲間の使っている物を要求せずに奪うということもあるが、物を使っている仲間のそばにくる、仲間の使っている物と同じ物を自分で確保する、仲間に自分の使っている物と同じ物を渡すといったかたちで 1 ～ 2 歳児でも物を介した多様な仲間とのかかわりを見ることができる。

1 ～ 2 歳児では、仲間意識から模倣が生じる時期ではなく、模倣する中で関係が広がるという指摘は興味深いものであった。同じおもちゃを共有して遊んで仲間となるとともに、このおもちゃは私の物、相手の物という区別とともに自他分離が進むプロセスを想定すると、この時期の子どもたちには単に物のとりあいがおきないようにするのではない丁寧なかかわりが必要と思われる。

藤田文氏は、幼児期における仲間との関係調整の能力の発達について報告して頂いた。関係調整には、従来の幼児期の仲間関係研究で注目されていた葛藤への対処だけではなく、自己と遊具の関係に他者をとりこむ関係重視、継続的に遊びを展開できる関係維持の能力がある。この関係重視と関係維持を遊び場面における交代制ルールの産出の点からアプローチした丁寧な実験によって、4 歳児から 5 歳児への変化が紹介された。

幼児は自由度が高い遊具ではルールの産出は難しい。けれども、遊具を限定すると、5 歳児では交代制ルールが安定する。4 歳児では、資源が少ないと交代が生じるが、資源がたくさんだと同時にやろうとする。さらに、交代の意志が必要なゲーム場面でみてみると、5 歳児では交代の意志が明確で交代のタイミングのルールもはっきりし、女児ではゲームをしている子ども主導で交代が生じる。一方 4 歳児では、交代の意志は不明確で、交代の基準もあいまいであり、待っている子どもたちから交代が生じる。これらの結果から、4 歳から 5 歳にかけての日常の遊びを見る際に、ルールの産出、交代という視点を得ることができた。

最後に、岩田恵子からは、ケアを大人が子どもに一方向的にする行為ではなく双方向的なものとしてみること、そして、赤ちゃん自身がケアする世界も、モノとかかわる姿をとおしてみられることを紹介した。また、そのような乳幼児のケアする世界に聴き入るとき、乳幼児自身、また大人も「学び」がひろがることをレッジョ・エミリアの例を通して紹介した。

物とのかかわりや遊びを丁寧に見ることによって、乳幼児期の仲間関係と社会性の発達、子どもたちの生き生きとした日々の他者とのかかわりがより鮮やかに見えて来る可能性が示された有意義な時間であった。

日　時　2015 年 3 月 2 日（月）10 時～ 13 時
場　所　玉川大学　大学研究室棟 B104 会議室
報告者　岩田恵子